

研究ノート

宝満山大巡行ルートの遺構 2

—法城窟、福城窟、益影井、風穴について—

山村 信 榮

1 はじめに

前稿(山村・中村「宝満山大巡行ルートの遺構」『太宰府市公文書館紀要—年報太宰府学—』第15号)では、宝満山中で江戸期におこなわれた大巡行で修法の場とされた中院および大南窟について、測量調査から得られた考古学的な所見を述べた。本稿では引き続き法城窟、福城窟、益影井、風穴について測量調査の成果に基づいて述べる。

2 法城窟

宝満山における近世大巡行においては始点である薬師堂の次に訪れる読経場所であり、礼拝対象の神仏は、森弘子氏の研究によれば国常立尊と浄妙法身大日如来であった。『筑前国続風土記』には「法城」窟、『竈門山宝満宮縁起』には「宝城窟」とあり、その原位置について『宝満山絵図』に「フク定ノイハヤ」と記されたことにもみられるように、歴史的には法城窟と福城窟が取り違えられ混乱がある。しかし、詳細に『宝満山絵図』を見れば、先の「フク定ノイハヤ」の記載の左側に並行して「フクチャウノイハヤ」とあり、その左に「コクウソウ」と見える。『宝満宮山中絵図』には虚空蔵の堂の右に福城窟が並記され、『筑前国続風土記』には弘法大師ゆかりの則求聞持堂(虚空蔵堂)は福城の岩屋(窟)の上にあると記載されることから、『宝満山絵図』の「フク定ノイハヤ」は法城窟の誤記である可能性が高い。

位置は山頂東崖直下にあり、山頂(標高829m)を構成する花崗岩の岩脈の延長の標高750m付近にある。切り立った花崗岩壁に上から滑落した幅約11mの花崗岩の一枚岩が覆う形状で、東側に幅2mの開口部があり奥にコ字形に約17m続く窟となり、西側には幅1mの開口部があり通り抜けできる構造となっている(第1図)。東側開口部は窟内から流れ出た水溜りがあり、その奥正面の高さ約1.2mの板状の立石に線刻で地藏菩薩像が彫られている。ここから先は常に灯火具なしでは先が見えない闇となる。地藏像よりさらにその奥へは岩塊を越えて約2mほど上がると花崗岩風化砂礫が堆積した平坦な面に至る。ここは窟内で最も広い空間であり、北側の岩壁の上部から突き出した方柱状の花崗岩に線刻の観世音菩薩像が彫られている。窟内の北側の壁沿いには祭壇が組まれ、玉依姫像を含む主に近世、近代の尊像群が見られ、今も不定期に供花がなされている。床面の土壌は南側の一枚岩の下に向かい浸食作用によって流出している。今回の調査でここから土師器片に混じって須恵器の坏と考えられる供膳具の体部片が出土しており、窟内の使用が8世紀まで遡る可能性を示している。

窟内にある線刻の地藏菩薩と観世音菩薩像は室町期との意見がある。像様は儀軌から多少逸脱した感があり、時期的には室町期より下るものではなかろうか。森弘子氏の研究によれば窟内は近世においては禁足地であって、船曳鉄門の『竈門山陵考』には「この窟には昔から八大竜王を祀って、その奥は竜宮城に通じていると伝えられ、土を盛ったようになった所から奥に入ると神罰があたるといって、奥に入ることを禁じていた」と記されている。明治24(1891)年に福岡県や太宰府神社(現太宰府天満宮)により宝満山の祭神玉依姫の陵墓としてこの窟が調査され、それ以降、窟内で

の修行が厳禁となったとされている。1960年におこなわれた九州大学の鏡山猛が担当した宝満山文化総合調査会による調査では、沖ノ島での調査成果を前提に窟内には手を付けず、窟外に4か所のトレンチが設けられ、窟の東開口部に設けられたAトレンチから糸切りの土師器皿と瓦器が出土しており、窟の使用は中世以降とされたが、今回の調査では窟内で古代の遺物が確認され、古代、中世、近世から現代に至るまで利用されてきたことが分かった。

3 福城窟

福城窟は大巡行においては法城窟の次に訪れる読経の場で、礼拝対象の神仏は国槌狭尊と円満報身大日如来であった。『日本書紀』では国槌狭尊は天地開闢の後に国常立尊に続いて登場する神である。国土を開闢以来安んじてきた神に奉仕する体を取るということか。

窟の位置は法城窟より西にトラバースしたほぼ同じ標高750m付近に位置し、上位にある益影井や竈門岩などの岩脈に属す（第2図）。花崗岩の岩脈が東に傾斜した崩壊礫が形成したガマ口状の窟で、長さ約6m、奥行き約2.5m、間口の高さ約1mを測る。上岩の北東側の肌に大日如来（バーン）の梵字の種子が円相を伴って刻まれている。雨落ちライン付近に粗雑な基壇状の石列が形成され、窟内の床を均して平坦化している。窟の前は幅4mほどの平坦地となるが、現状では堂舎の礎石や懸け屋のあった痕跡はない。今のところこの空間では遺物は見つかっていない。この窟から上位南西側にある益影井までの間は、岩間の狭い通路の痕跡がつづら折れでつながっており（おそらく巡行路）、途中に小規模な平坦面がある。『筑前国続風土記』などの地誌にはこの窟の上に弘法大師が虚空蔵求聞持法をおこなった故事による求聞持堂があると記され、『筑前名所図会』には「クモンシノトウ」と注記された横に一石五輪塔と層塔が描かれている。

4 益影井

益影の井は水配りの山としての宝満山の井泉中で最も名が知れた水源で、『筑前国続風土記』には常に水が清潔で増減がないこと、水面に顔を写せば老顔も少壮に見える故「益影」と名付けられたらしいことを紹介している。また、この水源は竈門岩で沸かした神功皇后が使った産湯の水を汲んだ場であり、『竈門山旧記』には弘法大師が虚空蔵求聞持法をおこなった際の闍伽水を汲んだ場とされ、『宝満宮山中絵図』には「弘法大師行所 トツコ水」と紹介されている。

現場は上位の竈門岩から続く花崗岩の岩脈の東斜面にある8mほどある垂直崖下に幅1.5m、奥行き1m、深さ0.6mの岩の窪みが、上位の岩から水を集めて井泉となっている（第3図）。その前は7m四方程度のやや井泉側に傾斜した空間とがあり、そこから下の福城窟に通じる小径の痕跡がある。今のところここでの遺物の回収歴はない。垂直崖に天蓋の線刻があるとされるが、現時点では認識できておらず、今後の課題である。

5 風穴

大巡行においては山頂の本社から釜蓋窟に至る行路中に山頂の舞台岩を降りた後に法喜菩薩の祠の次に「風神」が位置付けられ、祭神として級長津彦命、級長戸辺命が挙げられている。『筑前国続風土記』には、山頂下に「風天祠」があり弘法大師が風神を祀ったとされ、『竈門山旧記』には、「今に至り毎年六月吉日納風の法を執行、彼の風穴を祭る事空海法師の遺法なり。風穴は秘密所なり。」と記載されている。

山頂の北東崖の法下の立方体に崩壊した花崗岩礫中に、V字に奥に狭くなる小規模な谷地形があ

り、崖中に幅0.5m、高さ0.6m、奥行き0.8mほどの方形の洞が口を開けており、古代から近世の遺物が谷中に分布することから、ここが記録にある風穴と思われる（第4図）。遺物には8世紀代の坏や皿などの供膳具、近世18世紀の肥前系染付磁器の皿、近世後期から近代の幅を持ち、内底面に梅鉢文の陽刻（浮文）を持つ土師器小皿がある。

明治初期に編纂された『福岡県地理全誌』には、竈門神社下宮の末社の中にも「風神社」が見られ、『竈門山旧記』には秘密所とされることから、宝満山では風の祭祀が重要視されていたことが知られる。宝満山は大宰府の北東にあり、中世以前の記録には「御笠山」と記されている。平城京の北東にも同名の「みかさやま」があり、『続日本紀』には養老元（717）年二月一日の条に遣唐使が出立に先立ち蓋山（みかさやま）で航海の安全を願ったことが記され、宝亀八（777）年二月六日の条には遣唐使が天神地祇を春日山（＝御蓋山）の下で拝したと記され、大宰府の御笠山と同様に奈良の都の北東の山では対外交渉に際して「みかさやま」で祭祀がおこなわれていた。矢野建一氏の研究によれば、この頃の中国「唐」の都であった長安でも『大唐郊記録』巻7に、立春後の丑の日に国城の東北で「風師」（風の神）を祭っていることが記され、唐では日月星辰山川薙沢などを神格化し、これを「天神地祇」と総称したとされ、都の北東で祀られたのは特に「風の神」だったことが知られる。級長津彦命と級長津姫命を祀る風宮社が奈良御蓋山の麓の春日大社の末社にあり、本殿を風の害から守ると同時に外敵を吹き払う攘災神的な神として現在も祭られている。宝満山頂直下で「風納の法」「風神祭」が行われた淵源には、古代日本が賓礼を整備した8世紀において唐の祭祀に倣って平城京や大宰府に風に対する祭祀場を整備したことにあると考えられる。その祭祀が少なくとも宝満山においては近世修験道の祭祀にまで引き継がれていたことは、信仰史として特筆すべき事柄と思われ、山の信仰の核心の場が大巡行の要所として位置づけされていたことは意義深いことである。

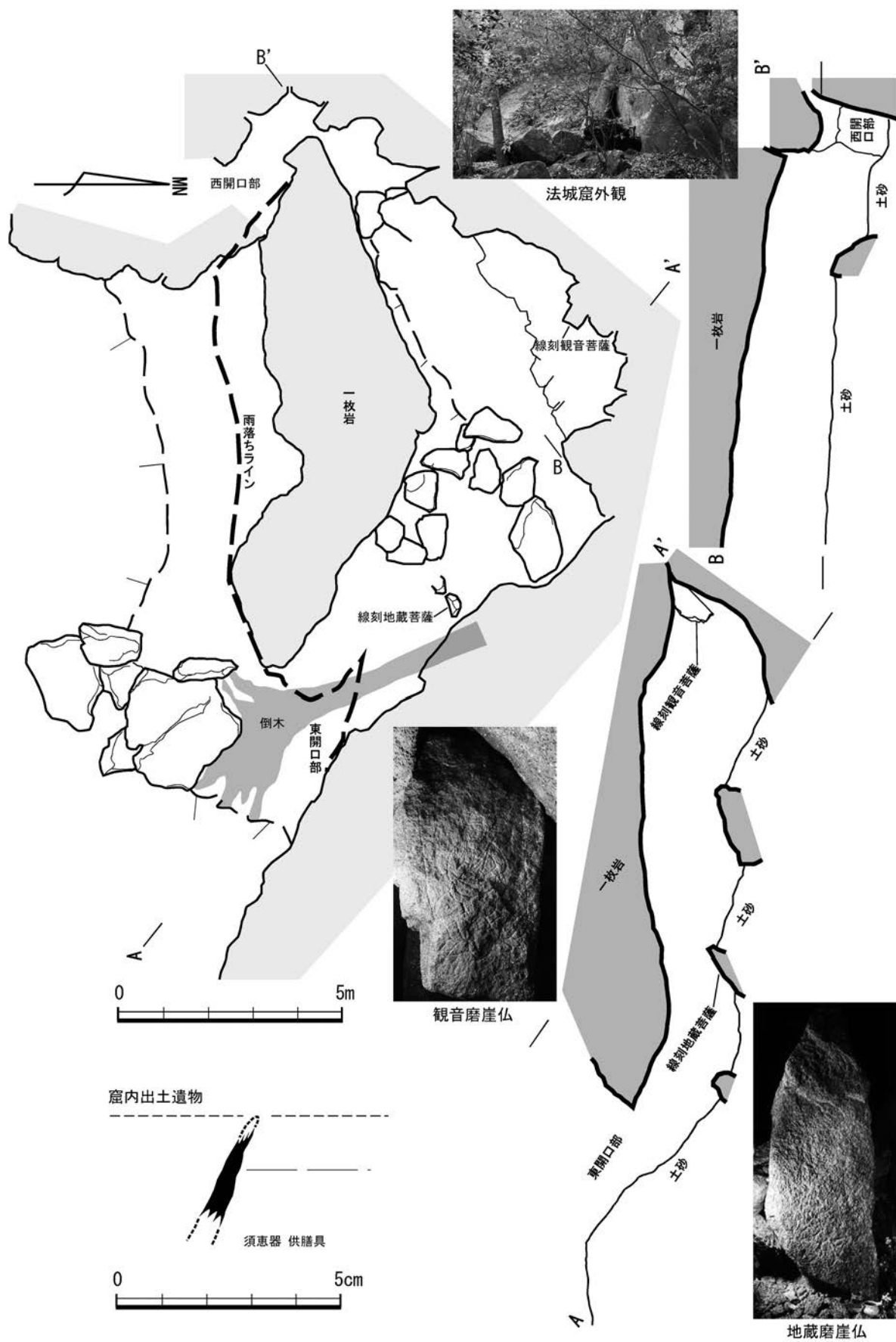
【参考文献】

森弘子『宝満山の環境歴史学的研究』2008年 岩田書院

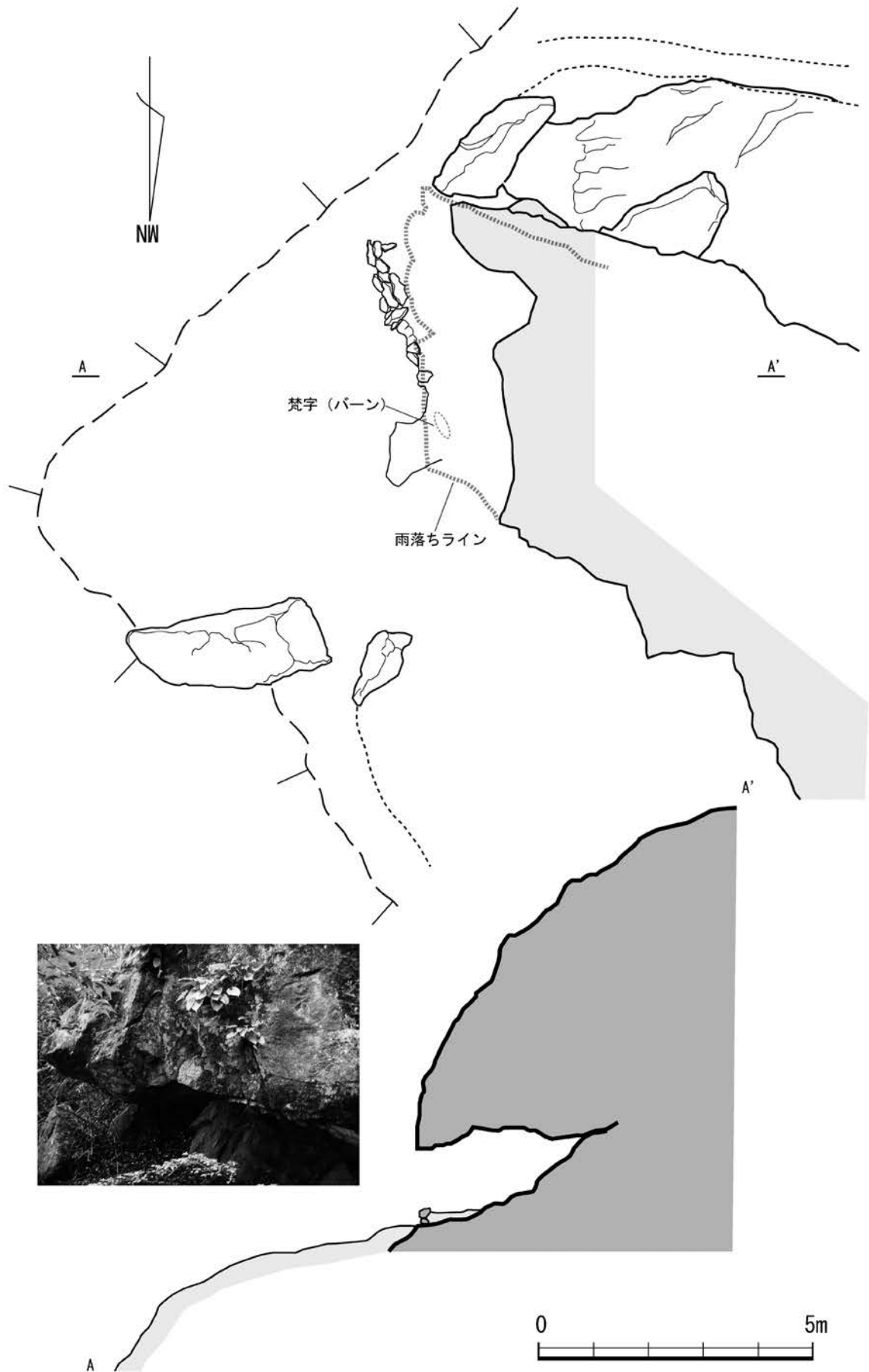
矢野建一「遣唐使の派遣と春日山祭祀」『専修大学東アジア世界史研究センター年報』第1号 2008年3月

山村信榮・中村茂央「宝満山大巡行ルートの遺構―大南窟および中院について―」『太宰府市公文書館紀要―年報太宰府学―』第15号 2021年3月

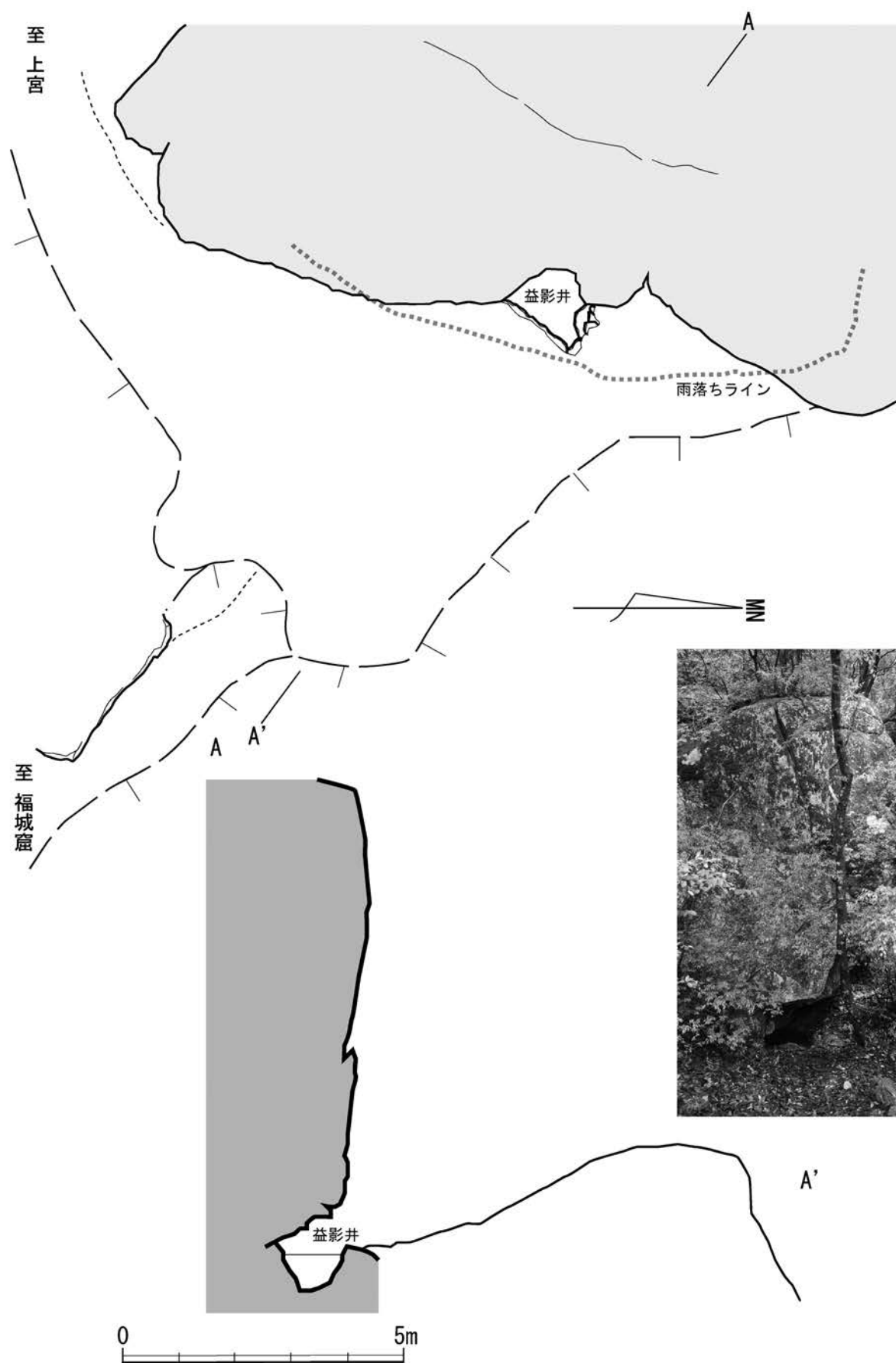
（やまむら・のぶひで 太宰府市教育委員会文化財課調査係長）



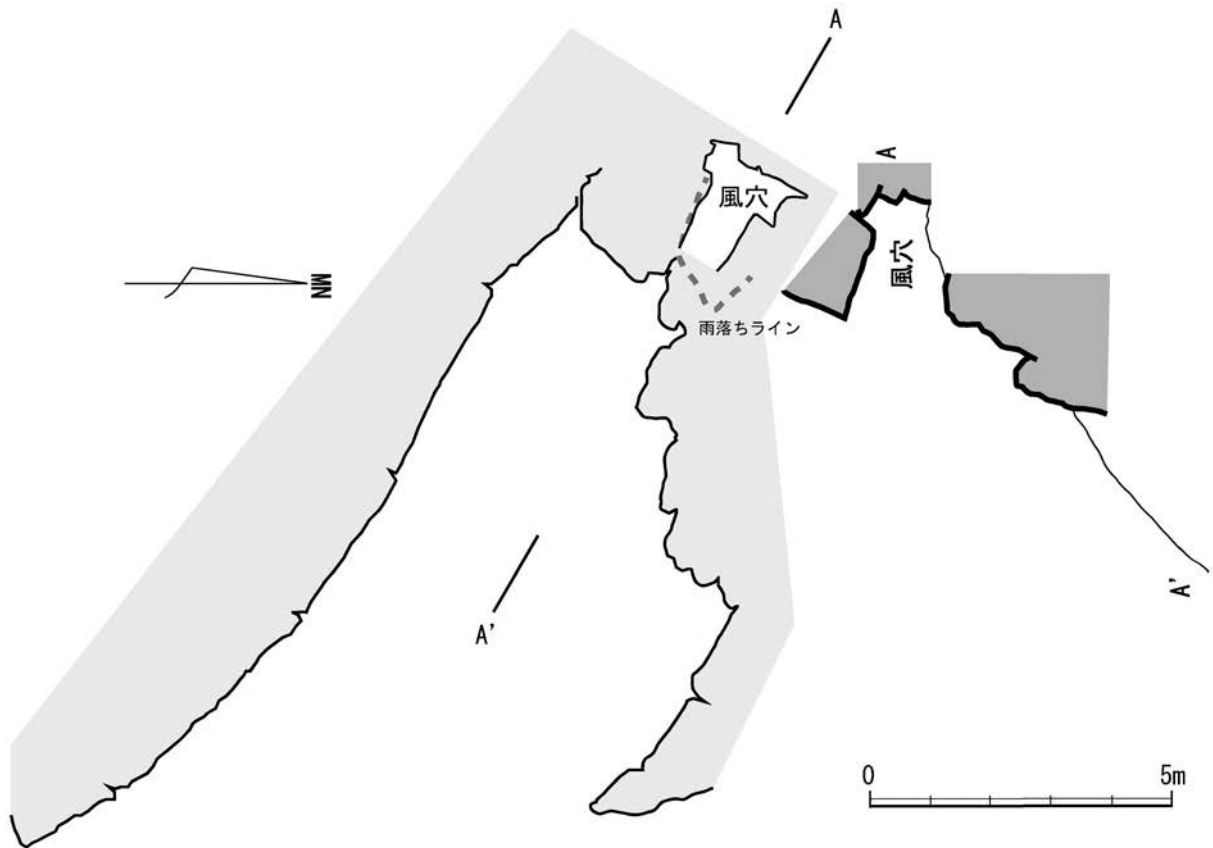
第1図 法城窟の遺構と遺物



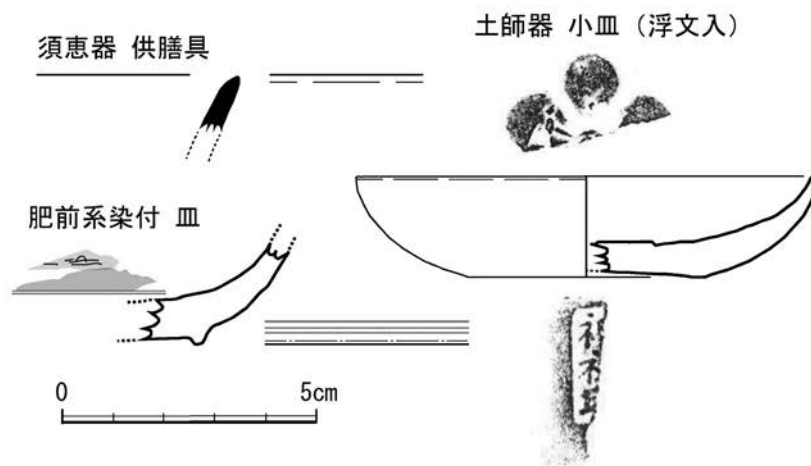
第2図 福城窟の遺構



第3図 益影井の遺構



推定風穴実測図



推定風穴出土遺物実測図



第4図 風穴の遺構と遺物